

# *The Newsletter* HOSEI **I.J.S.**

No.4 Sep.2006.



## C O N T E N T S

公開研究会報告	2
公開講演会報告	4
ワークショップ報告	5
2006年度 国際日本学 研究者一覧／活動の足取り	7
今後の活動計画／新刊案内	8

# 「日本学の型を破る一私はどのようにして日本学者になったか」

ジャン＝マリ・ブイス

(フランス国立国際関係研究所主任研究員)

● 日時：2006年2月16日(木) 18:30-20:30

● 場所：80年館 7階大会議室

2006年2月の公開研究会は、『1945年以後の日本』(1997)や『相撲取りがダンスをおぼえる時』(2003)の著者で、フランスにおける現代日本研究の第一人者ジャン＝マリ・ブイス氏を招いて開催された。ブイス氏は、氏自らの略歴から説き起こすというユニークな仕方、フランスにおける日本研究の現状と問題点を論じて下さった。講演の主旨を流れに沿って紹介していく。

パリ高等師範学校で学ぶ(1969-73)という、フランス文系エリートの典型的コースをたどった氏は若き日に学校で、'日本'という言葉を目にしたことも、口にしたこともなかったという。70年代前半、フランスでは日本は全く目立たぬ存在だったのである。氏自身のアジアへの関心は時代の影響ということもあり、まずは中国へと向かった。氏の最初の出版物は『紅衛兵と軍』(1975)である。しかし兵役の代わりに東京のリセに赴任したのをきっかけに、氏は現代中国とは対極の日本の'安定'(革命のなさ)へと関心を向けていく。氏の日本学者としてのデビューは論文『自民党派閥と現代日本の政治的安定のメカニズム』(1980)である。80年代前半、日本の'経済的奇跡'への大関心は現代日本の専門家の不在とも相まって、氏を日本紹介の表舞台へと押し出すことになる。『コンセンサス、神話と現実』(1984)が書かれる。さらに80年代後半は、貿易摩擦から始まる世界的な日本'たたき'の中で、別様にはあるが日本への関心は維持されていく。こうして1990年以降、氏はパリ政治学院の主任研究員として、フランスにおける現代日本研究の中心的担い手となっていくのである。

こうした今日までの氏の日本研究に、氏は4つの道筋を指摘した。

- 1) 歴史研究—ここでは『1945年以降の日本』(1997)が代表作で、政治、経済、社会、文化、外交等、あらゆる面から現代日本史が扱われた。日本の'安定'は多面的な諸要素の働き合いの結果であり、日本研究における文化の偏重を批判しつつ、氏は広くこのような多面的なアプローチの重要性を強調した。
- 2) 政治・経済研究—選挙制度だけでなく選挙活動や後援会活動をもふくむ選挙が研究され(1997)、また自民党内の派閥力学が研究されて(2001)、そこから'統御された再配分システムから成る政党支配'の概念が抽出された。さらに官僚支配の研究が手がけられ(1995)、そこからは'モザイク国家'の概念が得られた。そしてさらにそこに市民運動の研究(1996)と経済の研究が加味されて、'一般化された間接的な社会的保護'の概念(2001)が得られていった。氏は日本研究にとかく不足しがちな理論化の努力の重要性を指摘した。
- 3) 多様な研究—氏は'数少ない'現代日本研究者の一人として、さまざまな機会にさまざまなテーマについて語ることを求められてきた。そのようにしてなされたのがヤクザ研究とマンガ研究である。前者からは日本の支配層

についての'鉄の三角形'の概念(1999)が、また後者、そして広く大衆文化の研究からは、'村落主義'と'一般化された間接的な心理的保護'の概念が得られた。日本研究のテーマの多様性に比して研究者の数が少な過ぎること、そして、その少数があまりに文化研究に集まり過ぎていることを氏は指摘した。

- 4) 総合的研究—最近の『相撲取りがダンスをおぼえる時』(2003)がそれに当たる。日本の今日の'不安定'(従って、裏側で'安定')の全面的な説明が試みられ、経済のいわゆる日本モデル、金融・経済危機、国家組織および支配諸層の相互関係、政治システムの機能不全、市民社会の新たなエネルギー、経済危機から生まれたアイデンティティ危機といった諸問題が扱われた。ここでは社会学・経済学・政治学・比較文化論など人間諸科学の諸手法を駆使することが必要不可欠であったと氏は指摘した。

こうした4つの道筋を内実とする氏の日本研究の存在意義について、氏は結びの言葉で次の諸点を主張した。

- a. 自分の仕事は、いわゆる日本学者が扱わないテーマを扱ってきたこと。
  - b. 自分の仕事は、今まで用いられてこなかったような概念を日本研究にもたらしたこと。
  - c. 自分の仕事は、日本研究がこれまで周りに集めえたよりはるかに幅広い人々に訴えるものであったこと。
  - d. 自分の仕事は、互いに交流なく来た日本学の諸専門分野を束ねての研究を可能にしてきたこと。
- 以上の4点の指摘が講演の結びの言葉であった。

氏の仕事が日本ですでによく知られているとは言えないが、以上、氏自身の口から紹介されたそれは、問題関心の幅広さや、人間諸科学の高い学識に裏打ちされた研究手法の多彩さからして、<国際日本学>の優れたモデルであろうと聴衆は強く確信させられた一夜であった。

(法政大学文学部教授 安孫子 信)



# 「中国の高等教育および中日教育交流」

李 東翔

(中国駐日本国大使館教育担当公使参事官  
北京大学国際関係学院兼任教授)

- 日 時：2006年4月12日(水) 18:30-20:30
- 場 所：ポアソナード・タワー19階 D会議室

この日の国際日本学研究所公開研究会は、中国駐日本国大使館教育担当公使参事官、李東翔氏を招いて開催された。報告内容は「中国における高等教育の発展と中日教育交流の現状および課題について」であった。

中国の教育規模の現状についての説明後、中国における高等教育の改革と発展の歩みについての報告がなされた。その趣旨は以下の通りである。

1978年末に始まった改革開放政策は、大学・高等専門学校の学校運営のシステムと管理システム、学生募集制度と卒業生の配属制度、専門科目の設置と教材の体系、科学研究や経費、庶務サービスなど、高等教育の各方面にわたり大きな改革をもたらした。さらに、1995年の「211プロジェクト」、1998年の「985プロジェクト」とよばれる重点化戦略によって大学の研究と教育の質の向上をはかっている。

大学の運営管理システムについては、中央の教育部、各省庁が直接管理する大学のほかに、数多くの大学が所在地の地方政府の教育部門によって管理されるようになった。教育部直轄の大学は72校、他の中央省庁の直轄大学は40校、地方政府の直轄大学は1619校である。こうして、中央政府のマクロ政策における指導の下で、地方政府が計画管理し、采配を振るうことを主とする、新しいタイプの管理システムが形成されるようになった。

さらに、試験科目の軽減、試験の内容の見直し、試験回数の年1回から2回への変更、受験資格の緩和など、学生募集制度の変更は、受験競争の緩和を狙うと同時に、大学教育の大衆化に対応するものでもある。卒業生の進路についても、以前は国が配属を決定し、国家公務員になるのが一般的であったが、現在では、卒業生と求人側が話し合い、自主的に職業を選ぶことが普通になっている。

今後の課題として、9年制義務教育を徹底することを前提に、中国の近代化のために貢献する人材養成という観点から、高等教育の改革がさらに展開、推進されなければならない。そのさい、改革の基本的方針は、次のようにまとめることができる。

- 強固：成果を強固にすること
- 深化：改革を深化すること
- 向上：質を向上させること
- 発展：持続的発展の考え方をもち、そのステップをよく把握すること

引き続き、李氏から中日教育交流の現状と課題についての報告があった。その趣旨は以下の通りである。

中日両国は、一衣帯水の隣国同士であり、2000年余り文化交流の歴史がある。古代における留学生交流は、今から

1200～1300年ほど前から、つまり隋や唐の時代(日本の天平時代)で、主に日本人が中国へ留学した。例えば、阿部仲麿呂、空海など。ところが、現代になると古代とは逆に、主に中国人の日本への留学となるが、これは二つの時期に分けられる。第一の時期は、20世紀前半、明治の末期から昭和の初め頃までである。主な人物として、例えば、文豪の魯迅、郭沫若、周恩来元総理などがある。第二の時期は、中日国交正常化の1972年以降である。

1972年以降の国際交流は、その後さらに発展し、中国から日本への留学整数は14万人余りに達している。日本から中国への留学生ものべ10万人を超えている。現在までに約2万人の中国人留学生が日本での学業を終えて帰国した。その多くが各分野の中堅として活躍し、中国近代化のために積極的な働きをしており、各領域における中日両国の交流と協力を推進するための架け橋となっている。中国に留学した日本人学生も、幅広い分野で中日交流を推進することに貢献している。

留学生交流は、日中友好という観点から、さらに推進する必要があるが、そこにはもとより、異文化理解、異文化間対話にともなう困難をどう克服するかという大きな課題が横たわっている。

李氏の以上のような報告を受け、議論が交わされたが、それを通じて、日中の高等教育が抱える問題の比較、とりわけ中国の高等教育が抱える特殊な諸問題、さらに、日中留学生交流における異文化理解、異文化間対話にともなう具体的な困難などについて、理解を深めることができた。

(国際日本学研究所所長 星野 勉)



## 『日本学のパラダイムの変化と博物館』

ヨーゼフ・クライナー

(法政大学特任教授)

- 日 時：2006年6月1日(木) 18:00-19:30
- 場 所：ポアソナード・タワー 26階会議室A

### 日本学を発展させる上で示唆に富んだ講演

クライナー氏は、ヨーロッパにおける日本学研究の発展と日本とヨーロッパの文化交流に大きな足跡を残してこられた。今回の講演では、ご自身の研究経歴の紹介を交えながら、ヨーロッパにおける日本学の歴史、日本学研究のパラダイムの変遷等について語られた。今後の日本学研究の発展にどのような視点が必要かを考える上で、また、日本と諸外国の文化交流を成功させていく上でどのような配慮が必要かを考える上で示唆に富んだ内容であった。

(「Japanologie」から「Japanese Studies」へ)

講演の前半で、クライナー氏は、日本学には「Japanologie」から「Japanese Studies」へというパラダイムの変化があったことを説明された。日本学は、19世紀半ばに「Japanologie」と呼ばれ、研究分野として次第に認知されるようになったが、当時の研究テーマは主として日本の文学、とりわけ古典文学で、研究手法は文献学(Philologie)的手法が中心であった。その後、20世紀後半になり、日本学は「Japanese Studies」と呼ばれ、研究テーマも、欧米自身が必要とするもの、生活に役に立つものへと次第に変化し、研究方法も社会科学的方法が採用されるようになった経緯について、氏は、豊富な事例をあげて説明された。ヨーロッパの日本学をリードされてきた氏の説明は、日本学研究者の歩みを彷彿させる迫力に富んだものであった。日本学研究者が、どのような関心に基づいて、何を研究してきたのか、また、研究者が所属する国や組織でどのように評価されてきたか、また、日本では彼らをどのように評価してきたかを総括することは、今後の日本学研究の在り方を考える上でも重要である。今日、外国の研究者が日本学研究により、当該国の様々な課題を解決するための手懸りを得ようとしていることは歓迎すべきことである。この背景には、日本の経済的発展に伴い、世界各国の日本への関心が高まってきたことがある。諸外国の日本学研究が今後どのように進展していくかは、今後、国際社会で日本がどのようなかたちで存在感を発揮できるかということと繋がる問題であると思う。

### 日本研究学と博物館

講演の後半で、クライナー氏は、日本学研究における博物館とそのコレクションの役割について触れ、その積極的活用を提言された。氏の研究は、学際的な研究、国際的な研究、比較研究を重視するところに特徴がある。氏のこれまでの研究姿勢に基づく提言は、博物館とそのコレクションを活用した研究の有効性を考えれば、今後の日本学の方向付けに繋がる、意義のあるものである。氏は、文献資料やフィールドで得るデータにはない、博物館のコレクションの持つ資料価値に着目され、博物館のコレクションを活用した研

究を数多く行われている。氏は若い頃ドイツの博物館の所蔵する日本の文化財を扱う経験をされて以来、ヨーロッパの博物館に所蔵されている日本の文化財の整理、分類、研究に従事されてきた。また、文化交流面では、2003年にドイツ・ボンで開催された展覧会「日本の美 日本の心」では、ヨーロッパが持つ、単純なステレオタイプの日本美術観を押し、日本の多様性を理解することを意図した挑戦的な展覧会を企画され、海外で行われる日本文化を紹介する展覧会に偉大なる革新をもたらされた。

さて、氏の提言に、博物館と大学はどう対応すべきであろうか。日本では、長い間、物質文化への関心が低かったこともあり、博物館の歴史は浅い。大学と博物館の連携による人文・社会科学系の研究は、大学共同利用機関である国立民族学博物館、国立歴史民俗博物館が設置されてから本格的に始まった段階で、研究者が博物館を積極的に活用するまでには至っていない。今後、博物館は、国内外の研究者に向けて、コレクションを研究素材として活用してもらえるように、コレクションのデータベース化を積極的に行うとともに、研究プロジェクトや収集・保存・展示などの業務に、博物館外の研究者に参加してもらい、研究者とのネットワークの構築に取り組む必要がある。博物館と大学等の連携により、新たなアプローチによる研究活動が開拓でき、日本の博物館も、古色蒼然とした雰囲気から脱皮して、公共性のあるコレクションの一層の活用や、開かれた運営ができるきっかけになる。クライナー氏のような優れた日本学研究者と連携できれば、日本学研究にとっても、博物館にとっても、極めて大きなメリットがあることは間違いない。

(法政大学特任教授 杉長 敬治)



## 歌舞伎の世界・歌舞伎の人生

- 日 時：2006年6月10日(土) 16:50-20:00
- 場 所：ポアソナード・タワー25階 B会議室

去る6月10日(土)、ポアソナード・タワー25階B会議室において国際日本学ワークショップ「歌舞伎の世界・歌舞伎の人生」(主催:法政大学国際日本学研究所、共催:法政大学大学院)が開催された。

今回は歌舞伎俳優の中村芝雀氏と社会学部教授の田中優子氏を講師に迎え、第一部は田中教授の講義と田中教授と芝雀氏による対談が、第二部では参加者有志を対象に、芝雀氏による女形の化粧の実演と所作の指導が行われた。

第一部の田中教授による講義では、「傾き踊り→遊女傾き→若衆歌舞伎→野郎歌舞伎」という歌舞伎の発展史を辿りながら、歌舞伎に「女形」が登場するまでの過程が説明された。講義の概要は次の通りである。

- ・歌舞伎の淵源である「おくにかぶき」の流行により、京の四条河原で遊女がおくに風の衣装などを身に着けて踊る「遊女傾き」が生まれた。
- ・この「かぶき」の担い手であった「傾き男」と「傾き女」は、日中は芸能者として活動するかたわら、夜間は売春行為に従事していた。そのため、江戸幕府は治安と風紀の維持のため役者と遊女の分離を進め、芝居町と遊郭が成立した。
- ・この後、幕府の禁令などもあって遊女傾きは衰退し、代わって「若衆歌舞伎」が登場したが、両者は本質的に同じだったため幕府により禁止された。
- ・最終的に成人男性によって演ぜられる「野郎歌舞伎」が幕府の許可を得たことで、「野郎歌舞伎」が興行の主体として定着した。
- ・「野郎歌舞伎」では女性や少年の役者の出演が不可能であったため、男性の役を演ずる「立役」と女性の役を演ずる「女形」との分化が生じた。
- ・「おくにかぶき」は能と同じ楽器編成を用いていたが、「遊女傾き」は三味線を導入し、音楽面で性格的な変化をもたらした。その後、「かぶき」の単調な踊りは浄瑠璃や文楽の複合的な筋立てを導入することで台本の領域を広げた。
- ・幕府の風俗統制は1657年に新吉原の成立と芝居町を木挽町、堺町、葺屋町に定めたことで一応の完成を見た。また、1689年には踊子禁止令が出され、「遊女傾き」の系譜の残存者たちは売春をせずに芸能のみで生計を立てる「芸者」として市中で生活する道を選ぶこととなった。
- ・こうして生まれたのが吉原芸者、町芸者、深川芸者であった。その中でも、深川芸者は女性ながら男性用の黒羽織を着用し、「いき」の意識の発生に貢献した。
- ・深川芸者の事例は、「野郎歌舞伎」における「女形」と同じく、日本の芸能の中に「男性の女性化、女性の男性化」という伝統が存在することを示している。

以上の講義に続いて行われた芝雀氏と田中教授による対

中村 芝雀

(歌舞伎俳優)

田中 優子

(法政大学社会学部教授)

談では、「立役と女形の役柄の本質的な違い」「間の取り方」「歌舞伎における型の意味」などが取り上げられた。要点は次の通りである。

- ・女形は他の登場人物との関係の中で自らの立場を決める役柄、相手がどのように動くかを考える役柄である。立役との関連で考えると、立役が5mm、1cm前に出るのなら女形は5mm、1cm退くという点に両者の相異がある。
- ・「息を合わせる」ということが「間を取る」ということであり、間の取り方は荒事よりも世話物、とりわけ生世話物において重要な位置を占めるとされる。つまり、世話物には荒事のような見得や立ち回りがないため、人物の内面をより掘り下げて演じなければならないのである。
- ・歌舞伎における型とは演出の方針や方法のことであり、演ずる個体が異なれば「型」も自ずと異なってくる。
- ・一つの型を繰り返し見ることで役の本質が消化され、体得される。この境域を歌舞伎界では「手に入る」と称する。
- ・女形は「耐える」「辛抱する」という役柄に一種の美が存在する。

第二部では芝雀氏が参加者有志に女形の化粧を施し、役柄と化粧の関係などが説明された。化粧法は書物に残される類のものではなく、先輩から手を取って教えてもらうもので、家ごとに方法が異なるという。最後に、芝雀氏の指導により参加者有志が女形の所作を実際に体験し、何気ない動作が役柄そのものを規定するほどの力を有することが紹介された。

(国際日本学研究所学術研究員 鈴木 裕輔)



# 日中関係における多角的政策の模索 —国際日本学研究の方法論・異文化コミュニケーションの可能性を中心に— ケント・E・カルダー

(アメリカ・ライシャワー日本研究所所長)

- 日 時：2006年6月12日(月) 16:00-18:00
- 場 所：ポアソナード・タワー25階 C会議室

2006年6月12日(月)午後4時~6時、アメリカ・ライシャワー日本研究所所長ケント・E・カルダー氏を迎え、ワークショップを開催した。

カルダー氏は「日中関係における多角的政策の模索——国際日本学研究の方法論・異文化コミュニケーションの可能性を中心に——」という題で、大変興味深い問題提示をされた。この講演について、カルダー氏の論文「政策ネットワークに関する比較研究——日米と中米の関係をを中心に」(当日、会場配布)を参考に、以下のように簡単に纏めてみた。

まず、日中政策ネットワークの機能は米国と複雑に絡んでおり、日中米の三カ国関係は根本的な部分において相互に必要不可欠な関係にある。日米と中米の事例による比較研究は、国際関係における政策の重大危機および重要な接点がいかにあるかを理解するのに役立つであろう。1960年における日米安全保障条約危機や1978~79年にかけての中米国交正常化に向けた交渉に見られるような政策危機は、政策ネットワークの発展に影響を及ぼし、最終的にはネットワークを巡らせた範囲における関係を広げることになる。このような世界的な規模での政治経済運営にあたっての三カ国間におけるネットワークの発展について、カルダー氏は以下の提案を唱えている。

- (1)中国および日本の政策ネットワークが、総体的に捉えた米国との繋がりにおいて重点的範囲区分から見てどのように異なっているのか。そのための比較研究が重要である。
- (2)政策ネットワークはどのように発展していくのか、そしてどのようなもの影響によって促進され、あるいは阻害されているのか。異文化の角度による考察が不可欠である。
- (3)日中米の三カ国関係に対し、これらの政策は、日本および中国がそれぞれ米国との関係を維持しているネットワーク関係と対照すると、何を示唆しているのか。異文化理解の伴う異文化コミュニケーションによる関係打開が有効であろう。

総じて、「以心伝心」形式の対話がもはや国際的現場で通じにくくなり、文化の角度から相互の深層意識にまで達する対話が求められている。とくに日本にとってダイナミックな異文化コミュニケーションの展開が望ましい。比較文化的に得られた考察を政策及び政策ネットワークの形成に生かすことが迫られているという。カルダー氏の視点・論点は政策の角度から展開されていくものであるが、政策の可能性を支えている基部では文化の働きが重要視されている。複数の文化が関係する場合に、比較文化手法による異文化コミュニケーションが依然として必須と考えられている。それは1960年代以来、ライシャワー研究所が提唱してい

る方法論でもある。

実際、われわれの研究もその方法論に大きく啓発されている。ライシャワー研究所主導の日本近代化の研究(1960年代)をめぐる日中比較研究、その中で特に文化の違いへの研究視点の展開を知り、同研究所の成果に直接学びたく、このたび所長のカルダー氏をお招きした次第である。

法政大学21世紀COEプログラム「日本発信の国際日本学の構築」中のタスクフォース②「西欧(独・仏)・中国の日本文化研究の総合的研究」の研究活動に、中国における日本研究の総合研究チームは2003年から取り組んでいる。

社会文化の角度から日中相互認識の「ずれ」を究明することに視点を置き、相互理解の対話条件を整えていくための日中異文化研究を進めている。まだまだ暗中模索の段階であるが、カルダー氏による研究の進展状況を伺え、相互認識の「ずれ」を究明する作業が異文化コミュニケーションを切り口に日米・日中関係の深化を進める政策への通路につながる可能性を教えて頂いた。

また、カルダー氏を中心に、東大教授の高原明氏、朝日新聞論説委員・元アメリカ総局長の高成田享氏、麗澤大学教授の三浦正道氏のご高見及び参加者諸先生方のコメントを賜り、異文化コミュニケーションの可能性について活発な討論を深めた。

(国際日本学研究所専任所員 王 敏)



# 2006年度 国際日本学 研究者一覧

役職名	運営委員	氏名	所属等
センター長・事務室長	○	堀江 拓充	法政大学国際日本学研究センター担当常務理事
所 長	○	星野 勉	法政大学国際日本学研究センター副センター長、国際日本学研究所所長、文学部教授
専任所員	○	王 敏	法政大学国際日本学研究所教授
兼 担 所 員	○	飯田 泰三	法政大学沖縄文化研究所所長、法学部教授
	○	勝又 浩	法政大学文学部教授
	○	天野 紀代子	法政大学文学部教授
	○	澤登 寛聡	法政大学文学部教授
	○	漆原 和子	法政大学文学部教授
	○	小口 雅史	法政大学文学部教授
	○	間宮 厚司	法政大学文学部教授
	○	横山 泰子	法政大学工学部助教授
	○	相良 匡俊	法政大学社会学部教授
	○	金山 喜昭	法政大学キャリアデザイン学部助教授
	○	西野 春雄	野上記念法政大学能楽研究所所長、文学部教授
	○	山中 玲子	野上記念法政大学能楽研究所専任所員、同教授
	○	安江 孝司	法政大学法学部教授
	○	吉成 直樹	法政大学沖縄文化研究所専任所員、同教授
	○	安孫子 信	法政大学文学部教授
客 員 所 員	○	スティーヴン・ネルソン	法政大学文学部教授
	○	ヨーゼフ・クライナー	法政大学企画・戦略本部特任教授
		ジョセフ・A. キブルツ	フランス国立科学研究センター教授
		ローザ・カーロリ	ベネツィア カ・フォスカリ大学東アジア学科準教授
		コンスタンチン・O. サルキソフ	ロシア科学アカデミー東洋研究所主幹研究員兼所長特別顧問、山梨学院大学法学部教授、法政大学法学部兼任講師
		ワディム・クリモフ	サンクトペテルブルグ国立大学東洋学部教授
		許 介麟	台湾大学政治学研究所教授
		崔 相龍	高麗大学校亜細亜問題研究所長
		高 増杰	中国社会科学院日本研究所副所長・教授
		青木 保	早稲田大学教授
学 術 研 究 員		小川 健一	法政大学大学院人文科学研究科博士後期課程日本文学専攻
		鈴木 眞樹	法政大学大学院社会科学研究科博士後期課程政治学専攻
		叶 習民	法政大学大学院社会科学研究科博士後期課程政治学専攻
		諏訪井 セタリン	法政大学大学院国際日本学インスティテュート研究科博士後期課程日本文学専攻
		松下 奈津美	法政大学大学院国際日本学インスティテュート研究科博士後期課程日本文学専攻、日本学術振興会特別研究員(21COE)
		若曾根 了太	法政大学大学院国際日本学インスティテュート研究科博士後期課程日本史学専攻
		申 惠蘭	法政大学大学院国際日本学インスティテュート研究科博士後期課程社会学専攻
		式町 眞紀子	法政大学大学院人文科学研究科博士後期課程日本文学専攻
		河合 修	法政大学大学院人文科学研究科博士後期課程日本文学専攻
		林 寿美子	法政大学大学院国際日本学インスティテュート研究科博士後期課程日本文学専攻
		海保 花野	法政大学大学院国際日本学インスティテュート研究科博士後期課程社会学専攻
		鈴木 裕輔	法政大学大学院国際日本学インスティテュート研究科博士後期課程政治学専攻
		今泉 隆裕	法政大学大学院人文科学研究科博士後期課程日本文学専攻
		沼田 真里	法政大学大学院人文科学研究科博士後期課程日本文学専攻
		中島 哲也	法政大学大学院国際日本学インスティテュート研究科博士後期課程政治学専攻
客員学術研究員		彭 丹	法政大学大学院国際日本学インスティテュート研究科博士後期課程日本文学専攻
		ソニア・デルマス	法政大学大学院日仏共同博士課程派遣留学生
	安井 裕司	法政大学大学院社会学専攻研究員、バーミンガム大学政治・国際学部博士課程	

## 活動の足取り

1. 公開研究会 『中国の高等教育および中日教育交流』 李 東翔氏 2006.4.12 ボアソナード・タワー19階 D会議室
2. 公開講演会 『日本学のパラダイムの変化と博物館』 ヨーゼフ・クライナー氏  
2006.6.1 ボアソナード・タワー26階 A会議室
3. ワークショップ 『歌舞伎の世界・歌舞伎の人生』 中村 芝雀氏ほか 2006.6.10 ボアソナード・タワー25階 B会議室
4. ワークショップ 『日中関係における多角的政策の模索－国際日本学研究の方法論・異文化コミュニケーションの可能性を中心に－』  
ケント・E・カルダー氏 2006.6.12 ボアソナード・タワー25階 C会議室
5. 公開研究会 『琉球処分と最後の琉球王』 ローザ・カーロリ氏 2006.6.21 80年館 7階会議室(角)
6. ワークショップ パリ・シンポジウム第1回成果検討会 『パリ・シンポジウムを振り返る』 桑山 敬己氏、  
『「国際日本学」構築に向けての課題－パリ・シンポジウムをうけて－』 星野 勉氏  
2006.7.31 14:00～18:00 80年館 7階会議室(角)
7. ワークショップ パリ・シンポジウム特別成果検討会 『翻訳と文化アイデンティティ』 島田 信吾氏  
2006.9.26 18:30～20:30 ボアソナード・タワー25階 C会議室

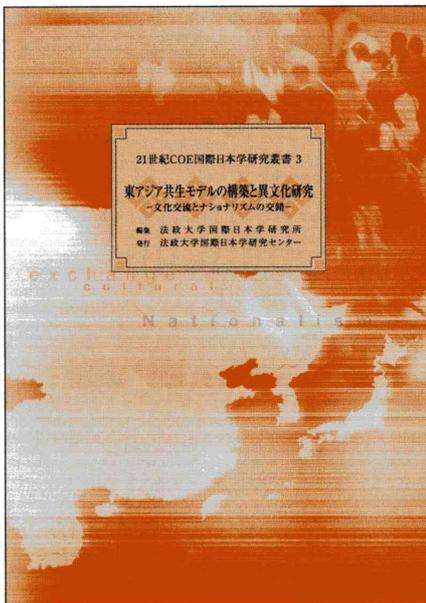
## 今後の活動計画

1. ワークショップ 『ドイツの研究者から見た丸山眞男の政治思想』ヴォルフガング・ザイフェルト氏  
2006.9.30 13:30～15:30 ボアソナード・タワー19階 D会議室
2. ワークショップ パリ・シンポジウム第2回成果検討会  
『日本学への2、3の提言ーパリ・シンポジウムに参加して』田中 優子氏、  
『ヨーロッパにおける日本研究と人文科学の未来』ジョセフ・キブルツ氏  
2006.9.30 17:30～21:00 ボアソナード・タワー19階 D会議室
3. ワークショップ パリ・シンポジウム第3回成果検討会 10月中旬
4. 国際シンポジウム 「日本学とは何か」 2006.11.18～19 ボアソナード・タワー26階 スカイホールほか
5. 国際シンポジウム 「世界の中の能楽」 2006.12.15～17 ボアソナード・タワー26階 スカイホール

## 新刊案内

### 21世紀COE国際日本学研究叢書3

「東アジア共生モデルの構築と異文化研究ー文化交流とナショナリズムの交錯ー」



この叢書には、以下の内容を収録している。

刊行にあたって 星野 勉

#### 1. 日本観と中国観

- ・戦後60年の日本人の中国観 庵 紹暹
- ・日本留学後の滞在国によって異なる対日イメージ  
ー改革・開放後の中国政府派遣学部留学生を事例にー 王 雪萍
- ・1960年代の日中文化交流をめぐるー考察ー『天平の躰』の翻訳事情を中心に 孫 軍悦
- ・日本の煎茶文化の特質についてー18世紀初頭から19世紀中葉ー 勝 軍

#### 2. 日中異文化の虚実

- ・中国・日本的な文化特性比較  
ー非親族的な社会集団の組織・構造からー 尚 会鵬(翻訳: 谷中 信一)
- ・日中広告文化の違いー最近の広告摩擦を機に考えるー 福田 敏彦
- ・日中戦争における旧日本軍と中国軍隊の「敵の慰霊」について  
ー日中の死生観をめぐるー 張 石
- ・日本語の個人感情移入の表現スタイルについて 徐 一平

#### 3. 文化交流とナショナリズムの交錯

- ・日中相互認識とナショナリズム 王 新生
- ・私が経験した韓国軍国主義 崔 吉城
- ・アイデンティティの重層と背反ーその彼方に 山室 信一
- ・東アジアにおける対話の土台づくり 羅 紅光
- ・韓国におけるナショナル・アイデンティティの新しい展開 鄭 大均
- ・東アジア諸国のナショナリズムの特質と紛争回避のための文化政策 坪井 善明

#### 4. 国際日本学研究における日中異文化研究

- ・異文化アプローチによる日中相互認識の「ずれ」考察 王 敏

監修・編集後記 王 敏

### 法政大学国際日本学研究所・国際日本学研究センター

〒102-8160 東京都千代田区富士見2-17-1

法政大学市ヶ谷キャンパス 第一校舎4階

TEL. 03-3264-9682 FAX. 03-3264-9884

E-mail: nihon@hosei.ac.jp

URL: <http://aterui.i.hosei.ac.jp/cgi-bin/nihongaku-top.htm>

